

一八八四年九月二十九日(月)

ドツキネーシヨル
南神村でナヴァミー・プージャの日、聖ラーマクリシュナと信者たち

ドツキネーシヨル
南神村で、聖ラーマクリシュナ、ナレンドラ、バヴァナートたちと共に

今日はドウルガー祭の第三日目(ナヴァミー・プージャ)、月曜日。キリスト暦一八八四年九月二十九日。今しがた、夜が明けたばかりである。大実母カーリーへの早暁の献灯(マンガラ・アーラテイ)はすでに終わり、音楽塔からは朝の音楽が流れてくる。手にカゴを持った庭師や、花盆を持ったバラモンたちが、花を摘みに来ている。大実母にお供えするためである。聖ラーマクリシュナは暗いうちから起きておられた。バヴァナート、バブラーム、ニランジャン、および校長は、前の晩から泊まりこんでいる。彼らはタクルルの部屋のベランダで眠ったのだ。目をあけると、もうタクルルは酔ったように踊っておられる。「ジャイ、ジャイ、ドウルガー! ジャイ、ジャイ、ドウルガー! (ドウルガーに勝利あれ!)」とおっしゃりながら――。

全く幼い男の子だ! 真っ裸なのである。マーの名を唱えながら、部屋のなかを踊り回っていらっしやる。

間もなく、こんどはこう言っておられる——「サハジャーナンダ、サハジャーナンダ(神に酔う喜び!)」それから、ゴーヴィンダ(クリシュナ)の名を、何度も、何度もお唱えになった——

おお、ゴーヴィンダ、わたしの生命^{いのち}、わたしの魂!

信者たちは立ち上がった! そして、吸いつけられたようにタクールの様子を見ている。ハズラーもカーリー寺院に住んでいる。タクールの部屋の南東側のベランダが彼の居所なのだ。ラトウもいてタクールにお仕えしている。ラカールはまだ、プリンダーヴァンからもどって来ていない。ナレンドラは時々通ってくるが、今日は来ることになっていない。

タクールの部屋の北側の小さいベランダで、信者たちは前夜、眠ったのであった。夜は比較的涼しくなるので、部屋とベランダの間のすだれは下ろしてあつた。皆が顔を洗った時分、タクールはこの北ベランダに來られてマツトの上にお坐りになった。バヴァナートと校長が傍に坐っている。他の信者たちも、時々、ここへ来ては坐っていく。

〔衆生は疑い深く(Septic)、神の分身は確固たる信念あり〕

聖ラーマクリシュナ(バヴァナートに)知ってるか、並の人間は信じることがなかなかできない。神の分身の信念は生まれつきのものだ。ブラフラーダは、カという字を書きながら声をあげて

泣いた。——クリシユナを思い出したからだよ！ 疑う^レのが並の人間の性^{さが}でね、連中の口癖はこうだ——『はあ、そうですか。でも……』

ハズラーは、どうしてもこのことが信じられないんだよ——ブラフマンとシヤクテイ、シヤクテイとシヤクテイを具えたものが不異^{おなじ}だということが。活動しないとき、あの御方をブラフマンと呼び、創造、維持、破壊しなざるときはシヤクテイと呼ぶ。だが、本質は一つのものなんだ。同じものなんだよ。火といえ燃える力が自然にわかる。燃える力といえば火のことを思い出す。片っ方をのけて、片っ方だけ考えるわけにはいかないんだよ。

お祈りのときこう言った——『マー、ハズラーはここにいる人(タクルご自身のこと)の考えをひっくり返そうとしています。あれにわからせてくれるか、さもなけりゃ、あれを此処^{ここ}からどこかに連れて行って下さい』そうしたら次の日、ハズラーがやってきて、『はア、あなたの言うこと、わかりました。遍在の意識としての神(ヴィブ)は、あらゆる場所におられます』と言った」

バヴァナート「はっはっはっは、ハズラーのことでそんなにお困りになったのですか？」

聖ラーマクリシユナ「わたしの心境は変わったよ。今はもう、人と躍起になつて議論するなんてことはできない。ハズラーと渡り合おうなんて気持ちにはなれないね。ジャドウ・マリツクの別荘で^(原典註)フリダイが、『叔父さん、私をそばに置いておく気はないのですか?』と言ったから、わたしはこう答えた。『ないね、わたしは以前^{まえ}のような心境じゃない。もうお前とイザコザする気はさらさらないんだよ』」

〔以前の話し——カマールブクルでの聖ラーマクリシュナ——世界は意識である——子供の信じ方〕

「智と無智はどこでわかる？——神が遠くにいると感じているのが無智。神は今ここに、と感じるのが智。

正しい智識を持つようになると、あらゆる物質が意識に充ち満ちている（意識そのもの）のがわかる。

甥のシヴ（ラームラルの弟、シヴァラーム）とよく話をしたものだがね。まだほんとに幼（ちい）さかった——五つ位だったかな。郷里（ぐら）にいたときだ。雷が鳴って稲妻が光った。するとシヴは、『叔父さん、あれ、あそこでマツチを擦（す）つてるよ！』（一同笑う）ある日、彼がひとりでバツタをつかまえているのを見た。そばで木の葉がザワザワ動いた。すると、木の葉に向かつて、『シツ、シツ、ほく、バツタをつかまえているんだ』と言うんだよ。子供は、あらゆるものに心のあることがわかるんだね！素直に信じることに。子供のように素直に信じなくては至（か）聖（み）はつかめない。ウーン、わたしはまア、なんとという境涯（きやうがい）だったことかねえ！ある日のこと、草むらで何かに咬（か）まれた。蛇に咬（か）まれたのかなと恐（おそ）くなった！さあ、どうしたらいいんだろう！もう一度咬（か）まれると毒が吸いとられる、という話を聞いた

（原典註）フリダイはそのとき、カーリー寺院の敷地に入ることを禁じられていた。寺院の持ち主を立腹させたのであった。フリダイは、タクールが寺院の持ち主に、もう一度彼を雇うよう頼んでくれることを望んでいた。フリダイはタクールに、身の回りのことなどとても尽くしてくれたが、一方ではつらく当たり、叱りつけるようなこともした。タクールは辛抱強く耐えておられた。

いたので、すぐにそこにしゃがみこんで蛇の穴を探しはじめた。もう一度咬ませようと思つてね。そんなことをしていると一人の男が、『何をしていらつしゃいますか?』と聞いた。一部始終を聞いてその人は、『前に咬まれたのと同じところを咬ませなければいけないのですよ』と言つた。

それで、わたしはあきらめてその場を立ち去つた。多分、毒のないサソリか何かにか咬まれたんだね。ある日、ルームラルから秋の湿気しづけが体のためによいという話を聞いた。なにかそういう詩があるとかで、読んでくれた。わたしはカルカッタから馬車で帰る途中、窓から首を突き出して、いやというほど冷たい空気に当つた。そのあとで病氣になつてしまつたよ!」(一同笑ふ)

〔タクール、聖ラーマクリシュナと葉〕

やがて、タクールは部屋に入つてお坐りになつた。タクールの足は両方とも少しむくんでいる。信者たちに、『指で押してみて、へこみができるかどうか触つてみてくれ』とおっしゃつた。一人ひとり押してみると、少しへこみができたが、皆、『何でもございませんよ』と口々に言つた。

聖ラーマクリシュナ(バヴァナートへ)お前、シンテイのマヘンドラを呼んでくれ。あの人が何でもないと言えば、わたしは安心するから——」

バヴァナート「ははははは、あなた様は葉を大そう信用なさいますね。私もそれほど信用してはおりませんが——」

聖ラーマクリシュナ「葉はあの御方のものだよ。ある場合の医者は、あの御方なんだよ。ガンガ―

ブラサード(医者の名)はわたしに、『夜は水を飲むな』と言った。わたしはその言葉をヴェーダの言葉だと思つて守つたよ。あの人はダヌヴァンタリ(医薬の神様)の化身だ」

ナレンドラ、バヴァナートたちと共に——三昧境

ハズラーが入ってきて坐つた。あれこれ話をなされた後で、タクールはハズラーに向かつておつしやつた。「ね、昨日、ラームの家には大勢人が来ていたよ。ヴィジャイも、ケダルもね。でも、わたしはナレンドラに会うと、どうしても感激するんだろかねえ？ ケダルはね、神ウチナーナンドに酔う部類の人間だとわたしは見ている」

タクールは前の日——マハーシユタミーの日に、神像まに詣るためカルカッタに行かれた。アダルの家に神像を拜みに行かれる前にラームの家にお寄りになり、そこで大勢の信者たちが集まつていた。タクールはナレンドラを見ると三昧状態になられた。ナレンドラの膝に片足を乗せて、立つたまま三昧に入られたのであった。

そのうちにナレンドラが到着した。タクールはもう際限もなく喜んでおられる。ナレンドラはタクールのお御足みを頂戴(フラナム)してから、バヴァナートたちと雑談をはじめた。そばに校長もいる。部屋に長い敷物がひろげられた。ナレンドラはしゃべりながら、敷物の上に腹ばいになった。突然、彼を見ながらタクールは三昧に入り——彼の背中の上にお坐りになった。(訳註、フラナム——尊敬する人目上の人に対する挨拶で、腰を曲げて相手の足先を右手で触り、その手についた埃を自分の額に持つていく挨拶の仕方)

三昧境！

バヴァナートが歌を唱う——

よろこびに満ちあふる大実母おんははよ

つたなき我を悲しませることなかれ

一八八三年四月十五日(日) 全訳あり

タクルの三昧は解けた。こんどはタクルがお唱いになる——

いつ、どんなに愉快な遊びをするか、誰が分かるだろう

マー、シャーマ 至福の波であるお方！

また——

さあ唱えよう、聖なるドウルガーの名を

(君は、私の、私の、私の心よ)

南無ナモ、南無ナモ、南無ナモ、ガウリー、南無ナモ、ナーラーヤニー！

ガウリー、ナーラーヤニー、共に大実母マの別名

あわれな召使しもべに慈悲たれ給え

君は夕暮れ、君は昼、君は真夜中

大実母^マは時に男となり、時に女となる

ラーマの姿で弓を引き、クリシュナの姿で笛を吹き
乱れ髪のカリー^リとなつてシヴァの心を迷わす

大実母^マは十の神姿となり、十の化身^{アヴァター}となる

今度こそ、どの姿でなりと私を渡し給え

ヤシヨ^マダーがバラとビルヴァの花を供えて祈れば

大実母^マはクリシュナを授けて希みを満たした

森に住もうと、何処に住もうと、マーよ

私の心はいつも変わらず君の蓮のみ足に

何処で死のうと、災難で死のうと

十の神姿、十の化身^{アヴァター}——共に一八八四年七月
三日（木）の脚注に解説あり

その時に聖ドウルガーを呼び唱えられるように

行け、行けと言われても、誰のところに行こう

この天上の美酒のようなターラーの名が、他のどこにあらう

退け、退けと言われても、私はない

足輪になって、マーの足でチリチリと鳴る

マーよ、君がシヴァの脇腹に坐るときは

ジャイ、シヴァ、ジャイ、シヴァと足首で鳴る

足に書いた名の印しが消えたなら

大地に君の名を書くゆえに、その上に御足をのせ給え

大実母がトビになって大空に舞うときは

私は小魚となって下の川で泳ごう

大実母¹の爪にかかって命尽きる時

願わくは、色美しきみ足もとに憩わせ給え

渡しておくれカーリーよ、カーラの女よ

君の両足の舟に私をのせておくれ

カーラー——絶対神シヴァの別名、^ク死^ク時^クの意あり。シヴァの配偶者がカーリー^(パールヴァティ)(創造の女神)

君は天国、君は地上、君は地獄

ハリ、ブラフマー、十二のゴパール、みな君の手になる

ゴローカではサルヴァマンガラー、ヴラジャではカーティヤーヤニー

カーシー(バラナシ)ではアンナプルナ、マー、また、無限の姿形をとる^(訳註1)

ドウルガー、ドウルガー、ドウルガーと呼ばば、どんな道を行こうと

三叉の鉾^{みづまた}を持つたシヴァが必ず護つて下さる

(訳註1)ゴローカはヴィシヌス神の住居、サルヴァマンガラーはヴィシヌス神の妃。ヴラジャ(プリンダーヴァ)はクリシュナの住居、カーシー(ヴァーラーナシー)はシヴァの住居

バヴァナート、ナレンドラたちの間で聖ラーマクリシュナ、三昧に入り、また踊る

ハズラーは北東のベランダで、ハリ称名用の数珠をつまぐりながらジャパ(神名、マントラなどを繰り返して称える)をしている。タクールは彼の真ん前に行ってお坐りになり、ハズラーの称名用の数珠を手にとられた。校長もバヴァナートもいっしょについて行った。時間は十時ころだろう。

聖ラーマクリシュナ(ハズラーに)ね、わたしは数珠が使えないんだ。——いや、いや、できるかな！
左手ではできる。でも、つまぐりながら称名することはできないよ！

こう言われながら、少し称名しようと努力なさった。ところが、称名をはじめのが早いか、三昧にお入りになった！

タクールは入三昧の姿のまま、そこに長いこと坐っておられる。手にハズラーの数珠を持ったままである。信者たちは驚嘆し、一言も口をきかずに拝見している。ハズラーも自分の席に坐ったきり、驚いた様子でタクールを見ている。しばらくしてから意識が戻った。タクールは、「お腹が空いた」とおっしゃる。平常の状態に戻るために、三昧の後でいつもこういうことを言われるのである。

校長が食べ物をとりに行こうとした。すると、タクールは、「いや、バブ、先にカーリー堂に行く」とおっしゃった。

〔ナヴァミーの祭りの日における聖ラーマクリシュナのカーリープージャ〕

タクールは煉瓦敷きの境内を通つて、南に向けてカーリー堂の方に歩いていかれる。途中、十二のシヴァ堂の方を向いて合掌礼をなさつた。左手はラーダーカーンタ堂だ。ここにもお詣りなさつた。カーリー堂に行つてマーを拝み、席に坐つてマーの蓮華の御足に花を供え、ついで、自分の頭にも花を供えられた。そして、お帰りになる時バヴァナートに、「お供えものの青ココナッツと聖足水チヤラチムリタを持つてくるように——」とおつしやつた。タクールは部屋に戻られた。バヴァナートと校長がいつしよである。(訳註、聖足水——昔は聖者の御足を洗つた後の水を言つたが、今は礼拝に使用した水を指し、礼拝終了後には皆にお下がりとして配られる。神のお御足チヤラチから流れる甘露アムリタの意味がある)

部屋に戻るなりすぐ、ハズラーの前に行つて礼拝をなさつた。ハズラーはびっくり仰天して立ち上がり、「な、何をなさる、何をなさる！」と口走つた。

タクール、聖ラーマクリシュナ「おや、悪かつたかい？」

ハズラーは人と議論をする際はきまつて「神はすべての人のなかにおられ、修行を通じてすべての人がブラフマン智えを獲ることができると言つていた。

食事の時間がきた。供養アールティと献灯の鈴が鳴っている。バラモンも、ヴィシヌ派の修行者も、乞食も、みな接待所に急ぐ。大実母ブララサドに供えた食べ物も、ラーダーカーンタの供えものも、すべて皆に分け与えられるのである。タクールのところにいる信者たちも、同様にそれをいただくのだ。接待所でバラモンの司祭が坐る場所に信者たちは坐つて、食べ物アールティをいただくのである。タクールは、「みんな行つてあそこで食べる——え？(ナレンドラに向かつて)——いや、お前はここで食べるだろ？」

うん、ナレンドラとわたしは此処で食べる」(訳註——タクルの信者の多くがバラモンではなかったが、司祭たちの坐る所に坐れるよう、特別に配慮されていたようである)

バヴァナート、バブラーム、校長はじめ皆はブラサードをいただきに行った。

食後、タクルは少しお休みになったが、それは僅かの間だった。信者たちがベランダに坐って雑談しているところへ出てきて、彼等といっしょになって嬉しそうにしておられる。時間は午後二時。皆が北東のベランダにいる。とつぜん、南東のベランダからバヴァナートが梵行者(ブラフマチャーリー)の服装をしてやってきた。赫土色の衣を着て、手に鉢カマダルを持って、顔いっぱい笑いをうかべている。タクルも皆も笑い出した。

聖ラーマクリシュナ「ハツハツハツハ、心がそういう(ブラフマチャーリヤの)境地だから、それで、格好もそれらしくするんだよ」

ナレンドラ「彼は梵行者(ブラフマチャーリー)の格好をしているけれど、私は密教行者(ヴァマチャーリー)の格好をしますよ、あつはつはつは」(訳註、ヴァマチャーリー——女性の協力を得てタントラ儀式を行う修行者)

ハズラー「じゃあ、女や酒を使った密教の儀式(五摩字)も皆、しなけりやなりませんよ」(訳註、五摩字——五つのM字を頭文字とする(1)酒、(2)肉、(3)魚、(4)印契、(5)交合を用いたタントラ行法)

タクルは、この密教修行(ヴァマチャーラ)の話には何もおっしゃらなかった。そうだと相槌を打つことはなさらなかった。ただ軽く、一笑に付してしまわれた。そして、急に酔ったようになって踊

りはじめられた。こう歌いながら――

もうだまされなよ、大実母^マ！

赤色の、お前の足を見てしまったから――

〔以前の話し――ラージャナラヤンのチャンディー――ナクル・アーチャーリヤの歌のこと〕

タクルは、「アハ、ラージャナラヤンのチャンディーの歌はすばらしいなあ。こんなふうにして、踊りながら連中は歌うんだよ。それから、郷里^クのナクル・アーチャーリヤの歌。アハ、あの踊り、あの歌！」

五聖樹^{バンチャパテイ}の柱に一人のサードゥがきていた。非常に烈しい性格のサードゥだ。誰彼かまわず怒鳴りつけ、呪いをかけるのである！ その人物が木のサンダルを履いて部屋の中に入ってきた。

サードゥが、「こちらで火種をもらえますかね？」と言った。タクル、聖ラーマクリシュナは手を合わせてサードゥにあいさつをなすり、サードゥがいる間中、合掌したまま立っておられた。

サードゥが立ち去ると、バヴァナートは愉快そうに笑いながら、「あなた様は、サードゥをえらく尊敬なさって！」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハ、あれはタマスの口（を）持ったのナーラーヤナだ！ タマス性の人たちには、こういう扱い方をして気を和めてやることさ。それに、とにかくサードゥだよ！」

〔聖ラーマクリシユナとゴロクダム遊び——正しい人はいつ、どこでも勝つ〕

すごろく遊び(ゴロクダム)がはじまった。信者たちは楽しくあそび、ハズラーまでゲームに加わっている。タクールはその場に来て立つておられる。校長とキシヨリー(訳註)が(天界)に上がった。タクールはこの二人に合掌しておじぎをなさった! 「おめでとう、お二人さん!」とおっしゃって、校長にだけ「もう、お止し」と言った。タクールはゲームを見物していらつしやる。ハズラーが、天界から真つ逆さまに地獄に墮ちた。タクールはおつしやる——「ハズラー、どうしたい!——ソレ、もう一度!」ハズラーはやつと地獄から出たと思つたら、又もや地獄に真つ逆さま! 皆はアハアハと腹を抱えて大笑いした。

ラトウのサイコロは、世間の家々からいつべんに七層の意識を通り抜けて上がった! ラトウはダンスをはじめた。タクールは、「ネトウの喜び方を見る。こう行かなかつたら、さぞがっかりしただろうよ。(信者たちに向かつてそつと)——これには一つ、ワケがあるんだよ。ハズラーは高慢だから、こんなことでも自分は皆に勝つと思つている。神さまは、正しい心掛けの人には何時、何処でも恥をかかせないようになさるんだよ! すべてに勝つんだ」(訳註、ネトウ——ラトウのこと。ラトウは愛称をレトウとも言うが、タクールはさらにそれが訛つて、ネトウと発音することがあった)

ナレンドラたちに婦人を伴つてするタントラ修行(ヴァアマチャラ)を戒める

〔以前のことに——聖地参拝——カーシーでの秘密の集まり——聖ラーマクリシュナの子供の態度〕

部屋の小さな寝台にタクルは坐っておられる。ナレンドラ、バヴァナート、バブラーム、校長たちは床に坐っている。ゴシユパラとパンチャナミーの考え方についてナレンドラは話した。タクルはそれについて彼によく説明し、その修行方法を非難なざった。——「そんな方法で、本当に正しい修行は出来っこない。宗教の名をかたつて、官能の欲びを味わっているんだよ。

(ナレンドラに向かつて)——お前がこんなものに耳を貸すことはない。

バイラヴァ(シャクティ派の男性行者)、バイラヴィー(女性行者)も同じようなことをやっている。カーシー(ベナレス)にわたしが行ったとき、ある日、バイラヴィーの秘密の集まりに連れて行かれた。一人のバイラヴィーは一人のバイラヴァを連れてきていた。わたしにお酒を飲めと言った。わたしは、『母さん、わたしはお酒を飲めないんだよ』と言った。やがて、彼等は飲みはじめた。わたしは思っていたよ、この次にはきつと称名や瞑想をするんだろうと。そうじゃなかった、踊り出したのさ！ ガンガーに落っこちやしないかと、わたしは怖くなってきた。彼らは、ガンガーの堤防で秘密の輪を作っていたんだよ。

(訳註2) キシヨリー——キシヨリーはマヘンドラ・グプタの末弟で、マヘンドラ・グプタが亡くなる一年前に亡くなった。タクルの出家した弟子たちに愛され、特にスポダーナンダとシヴァーナンダに愛された。晩年は独居していた。 Sri Ma Darshan / Swami Nityamananda によると聖ラーマクリシュナから入門式を受けたそうである。

夫婦が、バイラヴァ、バイラヴィーとなつて修行するんであれば、そりや尊敬に値することだ。(訳註)

(ナレンドラたち信者に向かつて)——わかるかい？ わたしの場合は、(女に対して)母親に対する態度だ。子供の気持ちだよ。母親とみることに、これはとても清浄な態度でね、ちつとも危険なことはない。姉妹とみることも悪くはない。妻とみなす——勇士の態度はともむずかしい修行だ。ターラクのお父さんはこの態度をとつて修行している。とても難しいことだね！ なかなか正しい態度を続けにくいことはできないよ。

いろいろな道が神様のところへ通じている。考え方がそれぞれの道なんだよ。ちようど、カーリー堂へ行くにもいろんな道を通つて行けるようにね。だが、清々しい道もあるし、ほこりつぽくて穢い道もある。きれいな道を通つて行つたほうがいいね。

たくさんの考え方——たくさんの道——わたしは見てきた。もう今は、そういうものに興味はないね。お互いにみんな争い合っている。此処には他人は誰もいない。お前たちはわたしの骨肉だ。だからわたしは、お前たちに言つておく——最後にこのことがわかつたんだよ。——神は全体、わたしはあの御方の一部分。あの御方は主、わたしは召使い。それから、時々はこういう気分になる。あの御方こそ、このわたし。わたしこそ、あの御方！」

信者たちは静まりかえつてこの言葉を聞いている。

[タクール、聖ラーマクリシュナと人間に対する愛情 (Love of mankind)]

バヴァナート「(へりくだって) 人との間に誤解があつたり意見が違つたりしますと、どうしたらいいかわからなくなります。そうなるともう、すべての人に好意を持つなどということは到底できなくなるのです」

聖ラーマクリシュナ「はじめ、いちど話をして、その人と親しみを持つように努力してみたら？ 努力してもうまくいかなかつたら、その後はもう、一切考えないことだ。あの御方が導いて下さるよ。あの御方のことを想っている。あの御方を差しおいて、他の人のために心を悩ますのは無駄なことだ」
バヴァナート「キリストやチャイタニヤといった方々はみな、すべての人を愛せよ」と言っていますが――」

聖ラーマクリシュナ「そりゃ、そうした方がいいともさ。――すべての存在ものに神さまが宿つていなさるんだから。でも、邪悪わるい人を見たら、遠くの方からおじぎをしていることだ。え、チャイタニヤ様デヴァだつて？ あの方だつて、心の通じない人の前では霊的な気分を抑えなすつた。シユリー・ヴァースの家で、彼の義母の髪の毛をつかんで引きずり出しなすつた」

バヴァナート「それは、ほかの人がしたのですよ。チャイタニヤ様デヴァではありません」

(訳註3) タントラでは修行に託かこけて性欲を満たす者もあるが、夫婦がお互いをバイラヴァ、バイラヴィーと見なし、他の異性には目もくれず、自分のパートナー同士で修行して、性欲をも抑制していくことは、聖ラーマクリシュナも良しとされた。

聖ラーマクリシユナ「あの方の同意がなくて、できることかね？」

どうすればいいんだい？ 他人の心が自分に向かないからって、夜も昼もそのことばかり考えているのかい？ あの御方に捧げるべき心を、こっちへ向けたりあっちへ向けたり、つまらんことに無駄使いしろというのかね？ わたしはいつもこう言ってる——『マーよ、わたしはナレンドラもバヴァナートも、ラカールも何も欲しくない。ただ、あなただけが欲しい！ 人間を追っかけたりかついだりして、何の益がある？』

この部屋にマーが来なされば

どんなに沢山お経が聞けるだろう！

どんなに大勢の坊さんやヨーギーが来るだろう！

大神シヴァまでがここへ来なさるよ！

あの御方をわがものにすれば、すべてが解決する。銀貨は土くれ、土くれが銀貨——黄金は土、土が黄金——こう言ってわたしは金を捨てたものだ。ガンガーの水底に放り投げたものだ。それからちよつと心配になつてね、ラクシユミー(富の女神)が怒りはしないかと思つて——。だつて、ラクシユミーの富を粗末にしたんだから。食べ物差し止められるかと思つて心配になつた。それで、マーに向かつてこう言つたよ。『マー、あなたが欲しい、ほかは何にも欲しくないんだ』と。あの御方を

かめば、ほかのものはすべて間に合うようになる」

バヴァナート「あつはつはつは、勘定高いなあ！」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッ、ああ、そうだよ。これが一番たしかな計算さ！」

神様が化身して、ある人の前に現れてこう言いなすつた。「お前のきびしい修行を見て、わたしは大そう満足だ。さあ、一つだけ願いごとを叶えてあげよう」修行者は申し上げた。「でしたら、一つだけお願いがございます。何とぞ、孫といっしょに坐つて、金の皿をつかつて食事ができますように」一つの願いで、沢山のこと叶うわけだ。金持ちになつて、子供が出来て、孫まで出来る！」（一同大笑）

神は守護者——聖ラーマクリシュナの大実母への聖愛——讚神歌の喜び

信者たちは部屋に坐つていた。ハズラーだけはベランダにいる。

聖ラーマクリシュナ「ハズラーは何を欲しがっているか知ってるかい？ 金がほしいんだよ。家が困っているから——借金があるのさ。だから、称名や瞑想をすれば神さまが金を恵んで下さるだろうと思つている！」

一人の信者「あの御方は、願望を満たして下さいることはお出来にならないのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方がそう思えばね！ でも、狂うほどの愛を捧げなければ、あの御方は全責任を負つては下さらないよ。食事の席に手をとつて坐らせてやるのは、小さい子供に対してだ

けだ。大人に対して誰がそんなことするものか。あの御方を想って、自分のことも自分でできなくなつたときにはじめて、神さまが責任を負つて下さるんだよ。(原典註)

ハズラーは自分の家の様子を聞きもしない！ ハズラーの息子はラームラルに、「お父さんに家に帰るようにと言つて下さい。私たち家族は、何もしてもらおうとは思っていませんから！」と言つたそうだ。わたしや、聞いて涙が出たよ！

〔自ら語られる不滅の言葉——プリンダーヴァン参詣〕

「ハズラーのお母さんもラームラルにこう言っているそうだ。『プラタブ（ハズラーのこと）に、一度帰つて来るように言つて下さい。叔父様（タクルルのこと）からもそう言つていただくようにお願いして下さい。プラタブの母親がそうお願いしていたと、おっしゃつて下さい！』と。わたしはハズラーに言つて聞かせたんだが——言うことを聞かないんだよ。

母親を軽く見ていいものかい？ チャイタニヤデルヴァは出家するとき、お母さんにわかつてもらうのにどれだけ苦労したことか。お母さんのサチーは、チャイタニヤデルヴァの師匠のケーシャブ・パールティを殺してやるとまで言つていた。あの方は手を尽くし、心を尽くしてお母さんにわかつてもらおうとしないすつたんだよ。こう言つて——『お母さん、あなたが反対するなら私は出家しません。でも、世間の生活をしていたら、私の肉体はきつと死んでしまいますよ。それに、お母さん、あなたのお望みのときは、私に会えるのですよ。私はお母さんの近くに住みますから、時々、会いに参ります』それで

やっと、サチーは承知なすった。

ナーラダは、母親が生きている間は苦行の生活に入ることではできなかった。そんなことをしたら、母親の面倒を見られなくなるからね。母親が亡くなってからはじめて、神様を覚るために家を出なすったんだよ。

プリンダーヴァンに行ったとき、わたしはもうここへ戻ってくる気はなかった。ガンガーマー（そこに住んでいた女の聖者）といっしょに暮らすことになってね、用意万端整っていた！ こっちの方にわたしの寝台を置いて、反対側にガンガーマーの寝台を置いて、もう二度とカルカッタに帰るまい、カイヴァルタ（漁師のカースト。南神寺院の所有者はこのカーストだったの飯を食うのはもうたくさんだ、と思った。すると、フリダイが、『いけません、カルカッタに帰るのです』と言う。フリダイがわたしの片手を引っぱると、ガンガーマーがもう一方の手を引っぱった。わたしはどうしてもそこに暮らしていたかった。そのとき突然、母親のことを思い出してね、とたんにすっかり気が変わったよ。お母さんは年をとっていなさる！ お母さんのことを心配したら、カミだろうとアミだろうと、どこかへ吹っ飛んでしまおう！ じゃ、やっぱりいっそのこと、お母さんのところにいた方がいい。そこで神さまのことを想っていよう、その方が安心だ。

（原典註2） 他を思うことなく 専心（ヒトコ）にわたしを拝み わたしの姿を瞑想している人々に対して

わたしは彼らに必要なものすべてを与え 持っているものを失わぬように保護する —— ギーター 9・22 ——

(ナレンドラに)——お前、ハズラーにちょっと言ってくれないか。彼はわたしに何日か前、『はア、では三日ほど郷里くにに帰ってきましょう』と言ったんだが、もうすっかり忘れてしまっているらしいから。

(信者たちに)——今日は、ゴシユパラだのホシユパラだのくだらない話になってしまったね。ゴヴィンダ、ゴヴィンダ、ゴヴィンダ、ゴヴィンダ！ さあ、ハリの名を少し称えよう。ザラザラした豆スープのあとには、パヤス(乳麩)の皿が出なけりや——」(訳註——ゴヴィンダ、ゴヴィンダ、ゴヴィンダ！と神の名を何回も唱えるのは、清め、お祓いの意味がある)

ナレンドラが唱った——

一なる原初清浄の精神アレンヤに、いざ、汝、心を深く集中せよ

そはすべての原因の、そのまた原因、生命いのちの相すがたとして全宇宙あまねに遍あまねく

活々いきいきと光り輝く一切の根元になるもの

信ある人はその目で明らかに見る

感覚を超えた永遠の意識そのもの

心の洞穴の奥ふかくきらめき

智慧と愛と、さまざまの美德に荘嚴され

それを瞑想するものは、一切の苦悩いやさる

限りなき徳の海、大平安の相をすがた

知り得るものは誰ひとりなし

謙へりくだつて足もとに救いを求める者には

慈悲をたれて自ら相を現すがたわし給う

それは無限に救ゆるすもの、それは幸と福の与えるもの

悲しみの海のなかで常に待ち給う救い手

罪と徳とを明らかに見て

あやまりなく果報を与え給う

愛に満ちた慈悲の大海、恵みの泉

尊き性をきけば、目に涙あふれる

その顔を仰あがぎて幸さいわいを受けよ

心尽くし、命尽くして、それを慕い求めよ

その妙うらわなる麗うらわしさ、まぶしき清らかさ

筆にも言葉にも表すすべなし
永遠の乞食となってその戸口かどに
絶ゆることなく仰ぎ拝み求めよ

次の歌

おお、心の大空チダーカーシヤに 愛の満月ゆたかに昇り

おお、愛の海原 よろこびに満ちあふる

恵みの御母に栄光あれ(ジャヤ・ダヤ・マイ)、恵みの御母に栄光あれ
信者の星々 キラキラと四方よもに輝き

おお、勝れたる友(神)は 信者と睦むつみあそぶ

恵みの御母に栄光あれ(ジャヤ・ダヤ・マイ)、恵みの御母に栄光あれ
天国の門開きて 歓喜の大波打ちよせ

新しき日の 春風はそよ吹きて

花咲く愛の芳香かおり やわらかに漂よい

おお、その香に ヨーギーの群つどれ集いて 歓喜に酔よう

恵みの御母に栄光あれ(ジャヤ・ダヤ・マイ)、恵みの御母に栄光あれ
恵みの御母に栄光あれ

情感の海の法則の蓮華に
歡喜カリー・ドールガの女神は現在し

狂喜の信者は蜂の群れとなりて その甘き蜜を飲む

見よ、大実母ハの輝く顔容カハハセ 満ちたりて美しく

蓮華の御足の下 聖者たちは舞い踊る

ああ、われ見たり 類タクなく素晴らしき生命の調和

ブレーマードース言えり 諸人モウヒトうたえ 大実母の栄光を

タクールは踊っておられる。ぐるぐる輪を描いて踊っておられる。一同もあわせてキールタンをうたい、踊っている。みな、喜びにひたっている。ナレンドラが歌い終わると、タクールはご自分で歌い出された――

よろこびに我を忘れて

大実母はシヴァと踊りたわむれ

美酒飲みて、ゆらりゆらりと

よろめけど倒れはせず

シヴァの胸の上にすつくと立ち

マーのみ足もと、世界は震える

マーとその配偶つ*(シヴァ)は歓喜して

恥ずかしさも恐れも眼中になし

校長もいっしょに歌っているのを見て、タクールは非常にご機嫌がよろしい！ 歌い終わると笑いながら校長におっしゃった。「これに太鼓が入ると、もっと面白くなるんだよ。タク、タク、ダ、ダイナ、タク、タク、ダ、ダイナ、タク、タク、ダ、ダイナ、という具合にね！」

キールタンをしているうちに、日はとつぷり暮れていた！